

メディカルニュース

「暮らし」のなかで看護の力を高めたい
看護人生50年を振り返って

京都府看護協会
豊田 久美子 会長



暮らし」というフィールドに立ち、新しい看護のかたちの実現を——いま、看護の在り方が大きく変わるうとしています。少子・高齢化、医療費削減、在宅医療の増加によって看護の力は病院だけではなく、あらゆる場所が必要とされています。地域の「暮らし」という視点からこれからの看護システムはどうあるべきなのか。地域医療や看護教育に長く携わってきた京都府看護協会の豊田久美子さんに自らのキャリアを振り返りながら語っていただきました。

（聞き手・池田知隆）

——新型コロナ禍も落ち着きました。いまだんないしでお過ごしですか。

今、日々の当たり前が在ること―新鮮な空気、陽光、食事を共にし、笑い、会話する有難さを享受しています。それこそが看護の真骨頂であり、ナイチンゲールの言う「細々したこととはいえ、それは生と死にかかわること」なのです。私たちの健康の要となる日々の細々とした日常生活の整え方がいかに重要であるかをこのコロナ禍で痛感しました。そして「療養上の世話」の専門家である看護職の誇りと、故に的確な判断力と適切なケアの提供について、いっそう精進しなければならぬと深く心に刻んでいます。

看護師への道

——さっそくですが、どうして看護師になろうと。

私は富山県の入善町という新潟県境近くで生まれ育ちました。農業を営んでいた父が病弱でした。

31歳のときでした。教えることは面白かったですね。ここで准看護師教育に携わりましたが、その後、准看護師のことを全く知りませんでした。戦後、急激な病院増設により看護師の需要が大きくなる中で、女子の高校進学率が低く、看護師を十分に増やすことが難しいことから、中学校卒業を要件に看護師を補助する資格として発足した制度です。看護師の「質」ではなく、「量」をまかなうためにもでした。

看護教育に携わって

——京都府医師会看護専門学校専任教員に。

その実態に触れて、これはなんだ、と思いました。准看護師は、看護師と同じことをやらされているのに、給料は低く、差別的な待遇を受けていました。しかし彼女たちはとても純粹で、看護職への強い情熱を持っていました。「教えることは希望を語ること。学ぶとは、誠実を胸に刻むこと」という有名な言葉（フランスの詩人、ルイ・アラゴン）がありますが、そんな教育への「希望」を胸にしまいつつ、そういう実践者になりたいと思いました。それがその教育の原点です。

——そして京都大学医療技術短期大学部へ。

京都大学の講師に誘われたときは、37歳。最新の医療技術がなされている病院でもう一度、看護を学んでみたい、とチャレンジすることにしました。京都にきて18年余、人生の折り返し地点でした。それからの京大での7年間、医療の進展に伴って看護がどうあるべきかを学ぶことができました。

同時に、京都精華大学大学院修士課程に入りました。社会学（家族社会学、福祉社会学）の春日キヌヨ先生に出会いました。人間を対象にした聞き取り調査研究の深さを学ぶことができました。その修士課程を終え、今度は滋賀医科大学に准教授として招かれたのです。

——研究のテーマは。

足浴と精神神経、免疫系との関連を調べること。術後や眠れない患者さん、あるいはガン宣告を受けられた患者さんに足浴を勧め、そのケアの効果を追及しました。「よしもと」を見たら、免疫力が上

ので、家族の一人が病むことによる影響を幼少期から感じていました。地元高校卒業後、教師になることを目指していましたが、4年制大学への進学を断念せざるを得ませんでした。冬は雪に覆われる地域でしたので、立山連峰の向こうに何かある気がして、当時はまだ少なかつた看護を学ぶことができる。ここ京都の京都市立看護短期大学に入りました。

——どんな看護教育でしたか。

公立看護短期大学として歴史があり、先生方が凛とされていましたね。自由な雰囲気、京都市立病院に実習に行きましたが、先生や看護師さんの立ち姿が本当に素敵でした。ただ経験論的な話が多く、もう少し理論的なことを聞きたかった。ただ一般教養の科目がたくさんあり、楽しかったですね。文学とか社会学とか引きつけられていく感じがしました。

高校の時も少し演劇をやっていたので、演劇部に入りました。劇団に進んだ先輩もいて、私も演劇が活性化しました。だんだん世の中で面白がられてテレビでも何度も取り上げられました。血液の循環が良くなるから、当然免疫は上がる。だけど、気持ちいいのはなぜか、何でぐらいいが最適なのか、頻尿の患者さんが足浴するとどうなのか。体の中のメカニズムと患者さんの反応をデータ化すれば、眠れない患者さんには何時ごろ足浴した方がいいのかがわかり、ケアに直結していくだろうと考えたのです。

——滋賀医科大学准教授から滋賀県立大学教授へ。

ちょうど看護教育の在り方をめぐって見直され始めたところで、滋賀医科大学の基礎看護学の准教授になりました。そのうち、滋賀県立大学の看護学部が設置され、その教授に呼ばれました。次々と新しい講座を構築しなくてはいならず、面白かったけども、大変でした。そして私の母校の京都市立看護短期大学の教授・学長を経たあと、私立の京都看護大学の設立にかかわり、初代学長になりました。

——大学のトップとして考えたことは。

どうい看護教育をするのか。少なくとも10年後の看護職を見据えて必要な教育をしなければなりません。今、やっていることをただコピーしてはダメです。

特に心がけたのは、学生も教員も職員も保護者も同じビジョンを共有すること。そして学生が看護職に誇りを持てるようにすること。看護の固有の価値、専門性、そして自律と自立、それをみんなが自覚して創りあげていくことでした。

看護職の未来に向けて

——いま、振り返って思うことは。

京都にきたこと、診療所の仕事、教育への道……どれもが私にとって人生の転機でした。でもやはり診療所にいるんな患者さんたちと出会い、地域

への憧れもありましたが、親にとってもそんなことは言えませんでした。

——それから京都市立病院の看護師に。

最初、手術室に配属されました。とても忙しく、看護って何か、自問自答するよい契機になりました。術前、術中、術後の段階で、医師が何を考えているのか想定できるようにになりました。医師に次々に器具を出して褒められるようになりました。私も看護の仕事が面白くなりましたが、医師に褒められても、なんかちょっと違う気がしました。看護の方に認めてもらいたかったのです。いつしか医師のアシスタントのままでもいいのか、と思うようになり、大学夜間部に入學しました。

——何を学ぼうと思ったのですか。

立命館大学人文学部（夜間）に1年生から入り、哲学科の哲学思想コースです。それを契機に市立病院を3年で辞めました。日中は眼科の診療所で常勤として働きながら通った大学生活は面白かったです。夜間部だからこそ、いろんな人がいましたよ。

——診療所で印象に残っていることは。

診療所で働き始めてまもなく、80歳代の患者、Mさんが「目が見えにくい」と切腹自殺を図ったのです。医師といっしょに手術をできる病院を探しました。私は手術室で仕事していた経験もあり、看護や術後の管理も少しはできます。Mさんは退院後、毎日、診療所に来られるようになりました。そのころ、高齢者の医療費は無料、いっしょに私の顧客みたいでした。

そのMさんがある日、ぱたっとう姿を見せなくなりました。Mさんが住んでいる市営住宅を探しあてると、夕方の光が差し込む狭い部屋でMさんは一人で寝ていました。枕元には目薬とみかん。若かった私はMさんの過去のことなど何も知らず、その姿にガーンとききました。数カ月前に奥様を亡くし、独りで生きる哀しみのなかで過ごされていたのです。白内障の進行によって視界がぼんやりして、先行きを悲観された末での自殺未遂だったと瞬時に理解できました。そのとき、患者さんの生活、暮らしを捉えなければ看護はできないと、本

や暮らしに触れたことが一番大きいですね。病院勤務の経験は短くても、診療所も含めると看護職の期間は長い。暮らしの中で看護していくのがやはり大切です。命あつてのその人だし、暮らしあつてのその人だし、命と暮らしを統合してアプローチする。つまり患者さんの全体を見抜かなければダメなのです。暮らしと重ねてその人へのケアをする。それは同時にやっていくのが大変重要です。あとは教育の道に入っていく。それで大学教育に入ったことでしょうか。もともと教育関係の大学に進学し、教員になったかったです。自分の中でずっと目指してきたわけではなくても、予定調和していくというか、起承転結として繋がっていくのでしょうか。この間、実父母が69歳で早く亡くなり、義母もガンになって看取り、大分にいた義父も認知症になって京都に来られて、10年同居するなどいろいろありましたがそれらもすべて私のある種の財産です。

——大学の看護学部が増えています。改めて看護職の魅力とは。

大学での看護教育が大衆化しました。看護師の免許を持つてば役に立つだろうとか、美容整形などをアルバイト感覚でできればいい、といった軽い気持ちの学生が増えましたね。かつての准看護師さんたちの情熱をいま、どれくらいの人々が持っているでしょうか。でも、高等教育に値する看護学が進化するようになっています。

看護職の魅力はなによりも人と寄り添えること。口先だけだったら、いろんな仕事があります。人に寄り添うといつても、普通は相手に警戒されます。しかし、看護師の場合、具体的にその人の世界に深く入っていくのです。対面し、肌と肌とを触れ合うところでケアをさせていただく。そこに看護職としての意味があります。相手の体の中を整理し、どこをどうケアするか。下手すると人の内面まで入っていきますが、そこに価値があり、それが許される重要な仕事です。そこをもっと真剣に、慎重に関わることが求められています。それにはもっと精進して、学ばなければなりません。

——地域に新しい看護の力を、といわれていますが。

看護は病院だけでなく、地域社会で求められるようになりませんが、よくよく考えると、本来、看

当に強く胸に刻みました。

そのMさんが老人ホームに入ることにになり、お礼の品物を持ってこられました。それは何だと思えますか。看護師用の白いストッキングだったのです。あのころ私たちはキャップやナース服と白いストッキングを履いていましたし、値段も高かったと思えます。それが私の看護の原点です。Mさんから看護師免許をもらった気がしました。

——まさに「暮らし」から看護を見るようになったのですね。

看護は生活の中にあります。診療所の中だけでは患者さんのことはわかりません。その診療所は京都市内の都部田園地区、富裕層の住む地域から下町まで4か所ありました。人々の暮らしは地域によってさまざま、病がつくられるのも暮らしの中からです。

例えば子供の遠視の場合、6歳くらいまで網膜に像を映さない弱視になります。小学校に入ってから発見されても、もう網膜は力を失っているのです。幼稚園とか保育園の段階でも視力検査が必要で、私たちはいろんなことと連携して訪問看護を行い、地域で行う看護の面白さをどんどん知るようになりました。

——そして結婚、子育ての生活は。

夫は建築設計士です。二人とも地方出身で親戚が遠く誰かが家にいることが重要だから、と1階を事務所にあとは住宅にしました。家で仕事をすると夫が二人の子の子育てにも協力してくれ、家事はできる人がする、という形で過ごしてきました。子どもたちからは、学校から帰っても待つてくれるお母さんはいない、と言われ、働きづめの母親として自責の念に襲われることもありました。そのうち、仕事しているから当たり前と受け止めるようになり、夫もママに手伝ってくれたので助かりました。男性はこうあるべき、女性はどうあるべきという考え方は我が家にはありませんでした。家族それぞれが割と自由に生きている、という中で私がいいます。

6、7年、そんな暮らしをしているときに、京都府医師会看護専門学校で教員募集の話がありました。あなたも教員になりました。だったので「診療所の院長に言われたのです。」

護は暮らしの中にありました。ナイチンゲールが『看護覚書』で言っているように、看護は総ての女性たちに身に付けてほしいことでした。

もともと看護は地域のなかで一人一人の暮らしに寄り添っていたものでした。医療の技術などの進展によって医師と一緒に歩き、医師の補助機能を担い、その流れで看護が病院だけでなく地域社会です。それがいま、医療を病院だけでなく地域社会でみようということになっています。私としては、地域の暮らしの傍らにあった看護が病院から元に戻っていくという原点回帰ではないかと思っています。

看護の役割は「いつでもですよ、赤ちゃんが生まれる前からそれからずっとお亡くなりになるまで求められています。病院であろうとご家であろうとどこでも」。そして「誰にでも」です。急性期であろうと回復期であろうと「いつでも」どこでも「誰にでも」に寄り添うのが看護。これからのように保健、医療、福祉のあり方が変化しようとして、看護は地域の人々の傍らに寄り添って、命と暮らしを支えていくことに変わります。

——若い人への期待と提言を。

プロフェッショナルとして自律的に、そして自発的に、自分で立っていき意識が強くもってほしい。どこかに所属しているのは、たまたまです。国家資格を持った一人のナースとして立ってほしい。そのようにして生涯かけて追求する奥深い職業だと思えます。

だから人生のライフステージに合わせて休み休みでいいけど、投げ出さないで追求していただく。その看護職の奥深さがわかります。いろんな人に出会い、その方の人生や生き方に学ばせていただく。それは一瞬だったとしても、人にそれだけ学べる奥深い仕事はそんなになんと思えます。

豊田久美子(とよたくみこ)会長

1956年、富山県入善町生まれ。富山県立入善高校卒。京都市立看護短期大学、京都市立病院看護師、診療所勤務、京都府医師会看護専門学校専任教員、京都大学医療技術短期大学部講師、滋賀県立医科大学准教授、滋賀県立医科大学教授、京都市立看護短大大学教授・学長、京都看護大学初代学長を経て、2022年から現職。